

一九三〇年代上海文壇における作家の「連合」をめぐって

(東京大学大学院) 藤澤 太郎

I. はじめに

本稿は筆者の1930年代中国文壇⁽¹⁾を立体的にとらえようとする論考の中で最も核になる部分、すなわち当時中国文壇の中心であった上海文壇のさらに「中心部」の様相を明らかにしていこうとする論考の一つであり、特に作家の「集結」・「連合」の動きに焦点を当てて、有力総合雑誌の動向と「自由人論争」・「第三種人論争」の展開を追っていこうとするものである。「自由人」・「第三種人」をめぐる論争に関してはこれまでも多くの研究がなされてきているが、ここでは「中国著作者協会」・「中国著作者抗日会」勢力の戦略と「自由人論争」との連関性や二つの論争相互の性格の相異に注目しながら分析していくことで、この論争の1930年代文壇史の中での新たな側面を見出していくことを目指したい。そして、最終的には論争とその前後の関連状況の分析を通じて、「組織」としての活動と比べてよりとらえにくく曖昧模糊としたこの時期の作家の「集結」・「連合」をめぐる大きな流動を浮き彫りにしていくことができればと考える。

II. 『現代』・『文学』「二極体制」の成立

具体的に論争の問題に入る前に、ここではまず当時作家の「結集点」として文壇のメカニズムの中で一つの「頂点」の位置にあった有力な総合文芸誌の動向を取り上げておきたい。当時最大の「作家連合」であった左翼作家連盟（左連）は国民党の弾圧の中で極めて限定された活動しかできず⁽²⁾、特にそのメディアに厳しい圧力がかけられたこともあって、結果的にこの時期文壇の「中心」

に位置していたのは有力な総合文芸誌であった。そして、そのような有力総合文芸誌が「自由人論争」・「第三種人論争」と接点を持ったことが論争にも大きな影響をあたえていったといえるからである。

1920年代から1930年代初頭にかけて、文壇の中で一貫して中心的文芸誌として君臨していたのは『小説月報』であった。茅盾・鄭振鐸・葉聖陶という編集者の関係上その執筆者は文学研究会の人脈を背景としていたことは間違いないが、中国最大の規模と権威を持つ商務印書館が発行元であったため露骨な「文学研究会色」が抑制され、結果として文壇において「唯一」の良質で「中立」に近い商業文芸誌たり得ていたからである。商務印書館の出版方針が同時代文学軽視へと傾いていく中であって1930年代初頭には一時の勢いを失いつつあったとはいえ、依然これに比肩する文芸誌は文壇に存在せず、そのため文壇において「唯一」中心たりえる雑誌であったことには変わりがなかったといえるであろう。

しかし、1932年1月28日に発生した上海事変はこの状況に大きな変化をもたらした。日本軍の砲撃によって商務印書館が壊滅的な打撃を受け、『小説月報』は停刊を余儀なくされたからである。これは文壇において「最高」の雑誌の消失であると同時に「唯一」の雑誌の消失を意味した。したがって、当時の文壇が受けた影響は単なる一雑誌の停刊にとどまらざるものがあり、とりわけ左連に加入していない作家（以下「非左連」系作家と略称する）にとってその打撃は計り知れないものがあったといえるだろう。彼らにとってこれは「金銭」と「作家としての権威」の両方を同時に

得られる雑誌の消失を意味し、その停刊は文壇に一種の「空白」が生まれたことを意味したからである。

このような中で、特に非左連系の作家の中で『小説月報』に替わる雑誌を待望する声が挙がったとしても不思議ではない。また、出版社の側でもこの『小説月報』停刊の間隙を縫ってそれに類する雑誌を企画するものが現れるのは当然の成りゆきであろう⁽³⁾。そして、結果的に『小説月報』の休刊を受けて真っ先に後継誌の創刊を企図したのは現代書局の張静廬であり、担ぎ出されたのが水沫書店・東華書店の挫折で当時故郷松江に返っていた施蛰存、生まれた雑誌が『現代』であった。『現代』の創刊意図を明確にするためにも、まずこの『現代』の主編であった施蛰存の回想を引いておこう。

私と現代書局の関係は雇用関係であった。彼らが文芸雑誌を発行しようとした動機は全く商業的な考えによるものであり、ただ長く継続する雑誌で、毎月出版されて書店をにぎわし、連動してその他の出版物がよく売れてくれればよかったのである。私が編集する『現代』がもし彼らの願望を満たすことができなかつたならば、彼らは私をやめさせ別の人に編集を頼むことができたのだ。このような状況下で、自分の『現代』が統一した傾向を持つ同人雑誌たることは絶対に不可能であった。だから、私は「創刊宣言」でこの点を強調して述べたのである。私が編集した各号の雑誌の内容でも、この精神は十分に貫徹されている⁽⁴⁾。

現代書局の側としても『小説月報』の停刊は大きなチャンスであった。現代書局は左翼文芸運動全盛期の流れにのって発行した『拓荒者』が国民党当局の締め付けによって発禁となり、また反対にその咎を責められ書店封鎖の脅迫を受ける中で

国民党組織部系の文芸誌『前鋒月刊』を刊行すると、今度は客を装った左翼人士に襲撃されていた。書店の事情から考えても「中立的」な文芸誌であった『小説月報』に替わり得る、政治色の少ない、売れる、そして「質」の高い雑誌の創刊を企図するのは当然のことであったといえるであろう。施蛰存はつぎのようにも回想している。

『拓荒者』から『前鋒月刊』へと至る二つの雑誌の盛衰によって、現代書局は名誉だけでなく経済的にも損害を受けていた。上海事変以後張静廬は早期に文芸雑誌を創刊し書店の地位と経営を復興しなければならなかった。彼の理想は次の三原則である。(一) 左翼雑誌は二度と出さないこと。(二) 国民党の御用雑誌は二度と出さないこと。(三) 時を急ぎ、上海の全ての文芸雑誌が上海事変のために停刊となっている空白期の中で最初に雑誌を出版すること。彼はしばらく考えた後、手紙を書いて私に頼むことに決めた。私は左連に加入しておらず、左連成立大会には署名がなかった。国民党とも関係がなかった。また、短期間のうちに文芸雑誌を編集する能力があったからである。彼は私が編集していた『新文芸』を見ておりこのような傾向の文芸雑誌が適当だと考えたのだ⁽⁵⁾。

張静廬自身も以下のように述べていた。

商務印書館の停止は新興の書店の利害にほとんど関わらなかった。新興の書店は新文芸の書籍の刊行を主要な業務としていたのに対し、商務印書館は1923年から1925年の間に文学研究会叢書などを出版した他はこのような路線を重視しなかったからである。ただ、長い歴史をもつ『小説月報』だけは膨大な読者をもっていた。しかし、当然この時期には同様に停刊となり、それと同時に上海にはそれなりの文芸雑誌がな

くなってしまうのであった。

「これは我々の為すべき仕事だ。営業面から考えても、すぐさま純文芸雑誌を刊行すべきだ。」

この提案はすぐに幹部一同の同意が得られた。そこで私は松江に手紙を書き施蛰存先生に主編をお願いした。——この時期彼は非常に適任の編集者であった。どの方面にも仇をもたず、文壇でどの作家ともこれまで摩擦を起こしたことがなかったからである⁽⁶⁾。

施蛰存はその他の回想でも『現代』が「中立的」な文芸誌であったことを再三にわたって述べているが、なによりその施蛰存の意図は「創刊宣言」に端的に現れている。

本誌は文学雑誌であり、あらゆる文学的な領域が本誌の領域である。

本誌は普通の文芸雑誌であり、上海現代書局が人を雇って編集を請け負わせているものであるため、狭義の同人雑誌ではない。

同人雑誌ではないので、本誌はいかなる文芸思潮・主義・党派も作りだそうとするものではない。

同人雑誌ではないので、本誌は中国の全作家の協力を受けて全文学愛好者に対しそれぞれに応じた貢献をすることを希望するものである。

同人雑誌ではないので、本誌に掲載する文章は編集者個人の主観を持ってのみ基準とするものである。この基準は当然文学作品それ自体の価値に基づくものである⁽⁷⁾。

このような『現代』の姿勢は読者の熱烈な歓迎を受けた。『現代』創刊号はまず3000部を5日で売り切り、さらにあわせて3000部、合計6000部を発行、その後も「第三種人論争」や第2巻1期の「創作特大号」などを契機として発行部数を増加させ

ていった。そして、他に競争相手がいない中で最大1万部から1万5000部にまで部数を増加させていったのである⁽⁸⁾。また、この『現代』には毎号300元が原稿料として書店から渡されていた。仮に15人で割ると1人当たり20元、これに比肩する雑誌がない中で作家にとっても悪い条件ではなかったであろう。したがって、執筆陣も左右取り混せて豪華である。震旦大学時代からの施蛰存の友人で第一線書店・水沫書店などで活動をともししてきた劉呐鷗・杜衡・戴望舒をはじめ、『新文芸』編集時期に施蛰存自らが「発掘」した穆時英、施蛰存・杜衡等と個人的なつながりが極めて深い馮雪峰、そしてこの馮雪峰を通じて魯迅も『現代』に寄稿していた⁽⁹⁾。左連の側からは他にも茅盾・周揚など「中枢」のメンバーが寄稿しており、さらには施蛰存と個人的につながりのあった丁玲も原稿を寄せている。巴金も周索非を通じて創刊号から寄稿⁽¹⁰⁾、郁達夫・老舍・沈從文などの非左連・左連離脱組の有力作家も原稿を寄せていた。このように『現代』はいわば「唯一」の有力な文芸誌として読者・作家双方から歓迎を受け一時期文壇に君臨していたのである。

この『現代』の誕生は基本的には『小説月報』の穴を埋めるもので、作家の側からも歓迎されるものであったが、一部にはこのような『現代』の成功を快く思わない人々もいた。中でも最も有力だったのは文学研究会の流れを汲む中堅・ヴェテラン作家勢である。とはいえ、彼らは基本的には社会的に高い知名度と高給の「本業」あるいは「副業」を持っていたため『小説月報』停刊による収入面での影響は少なく、また多くの作家は葉聖陶の勤務する開明書店のような有力な出版社とのコネクションにも恵まれていたことから、『小説月報』停刊後も短期的には打撃は少なかった。『現代』の活動はとりあえずは「黙殺」すればよかったのである。しかし、長期的に見ると『小説月報』がなくなったことによる発表媒体の喪失は

気に掛かったようで、1932年の後半になると発表の場を求めて『小説月報』の「正統」な後継誌を出す計画が持ち上がっていった。この動きは胡愈之の『東方雑誌』主編解任と左連の文芸機関誌『文学月報』の停刊を背景に、1933年3月燕京大学教授であった鄭振鐸の北平からの上海来訪によって活発化し、それが1933年7月に生活書店から創刊されることとなった『文学』へと結実していったのであった。

最終的に『文学』の編集委員会には郁達夫・茅盾・胡愈之・洪深・陳望道・傅東華・徐調孚・鄭振鐸・葉聖陶の9人及び魯迅の10人が参加していた。これは左連・非左連問わず文壇の「大御所」を集めた布陣であり、『小説月報』同様文壇の中心たることを目指す意気込みがうかがえるようだ。実質の編集には第2巻から主編者として名を連ねる傅東華があたり黄源が校正等補助にあたっていたが³⁰⁾、『文学』はその創刊時にこのような背景を持っていただけに創刊当初から『現代』を攻撃し『現代』との差異化を計っている。『文学』創刊号「一張菜單」の次のような表現は『文学』サイドの『現代』に対する立場が集約的に示されているといえるだろう。

我々のこの雑誌の内容は確かに「雑多」なものである。これは我々が特に言明するまでもなく、読む人がちょっと本誌の責任編集者と特約執筆者の名簿を見ればわかるであろう。しかし、この「雑多」というのは我々の雑誌が「第三種人」の雑誌であることを暗示するものでは決してない³¹⁾。

また、『現代』の側も『文学』創刊の動きが表面化する以前は、執筆の主力は施蛰存に人脈的に近いグループではあったものの基本的には「中立的」な立場を維持していたが、この『文学』の創刊の動きと軌を一にする形で変化が進んでいっ

た。施蛰存はその回想録で以下のように述べている。

1933年春、張静廬はある情報を耳にした。聞くところによると生活書店が『文学』月刊を創刊し茅盾と鄭振鐸を主編に招こうとしており、さらに日常作業をしてくれる人を探していて、鄭振鐸は傅東華を茅盾は杜衡を推薦しているということである。張静廬はこの情報を聞くや私のところへとやってきてこれはいったいどういうことかとたずねた。当時は「第三種人」の論争がちょうど一段落ついたところだったので、私は何週間も杜衡にあっておらず、またこのような知らせも耳にしていなかった。その日の夜私はすぐに杜衡に会いに行き、そのようなことがあるのかとたずねた。彼は口ごもりながら、それは事実だが自分はやりたくないと答え、またまだ協議中であるともいった。私はこのことが非常に意外であった。茅盾がどうして杜衡を雑誌編集の助手とするようなことがあるだろうか。

ところが、事態の進展はさらに私を驚かせた。張静廬が突然杜衡を現代書局の編集部に招いて私と『現代』を共同編集してもらうことを提案してきたのである。私は彼に状況を分析し説明した。杜衡が生活書店『文学』の編集をしなくても『文学』は創刊される。杜衡が『現代』の編集に参加すれば『現代』がすでに「第三種人」の党派的な雑誌になってしまったことを示すことになるため、こうしたやり方は『現代』にとって大いに不利なのだと。しかし、私がどのように説明しても張静廬は考えを曲げず、自ら杜衡を訪れて話をし私にも同意を求めたのであった。張静廬は出版社の責任者であり杜衡は私の古くからの友人である。どちらにも硬く拒み続けることはできなかった。そこで、『現代』は第3巻1期から奥付に私と杜衡の合同編集を示す

文字が加えられることとなったのである⁴³⁾。

結果からいえば、この『文学』創刊と同時期の杜衡の編者としての『現代』への参加が、『現代』の「第三種人」雑誌化の象徴的な出来事と見なされることとなった。政治色の薄い文芸雑誌が他になかった中で『小説月報』の後継を自認していた『現代』であるが、『文学』の創刊によってその「党派的」色彩がしだいにはっきりと現れるようになっていったのである。

とはいえ、この二誌を区別するものは実際には「思想的」な相異というよりも人脈的な相異でしかあり得なかった。その底流に流れていたのは『現代』の杜衡と『文学』の傅東華の対立である。杜衡と傅東華の間には、1925年杜衡が施蛰存らとともに編集に参加した同人雑誌『瓔珞』の中で傅東華の翻訳を決定的に非難して以来感情的なしこりが存在し、両者はいわば「犬猿の仲」となっていたという⁴⁴⁾。したがって、傅東華の個人的な杜衡に対する恨みが「第三種人」云々といった「理念」の前に存在したわけであり、『文学』の『現代』に対する攻撃も基本的にはその枠を超えるものではなかったのである。これは、『文学』創刊当初の魯迅をめぐる関係に象徴的であろう。魯迅は当初は『文学』の編集委員会に加わり『文学』創刊号から文章を発表していたが、第2期に掲載された傅東華「休士在中国」に立腹、それ以降はしばらく『文学』には寄稿しなくなっていったのであった。そもそも前節でも触れたように魯迅の「側近」馮雪峰は施蛰存・杜衡と極めて親しく、傅東華としてはおもしろくなかったことであろう。その対立を『文学』内部に持ち込んだことによって事態は「複雑化」していったのである。このように、本来であれば両者とも政治色の薄い文芸誌として創刊された『現代』と『文学』との間には、その「透明性」以上に「見えない色」が存在していた。そして、『現代』の傾向の一面を象

徴していたのが杜衡色であったとするならば、『文学』の傾向の一面を象徴していたのは傅東華色ともいえるものだったのである⁴⁵⁾。

もちろん、これまで盛んに強調されてきたように『文学』の一つの側面として左連との密接な関係が存在することも指摘しないわけにはいかないだろう。合法的な活動が難しくなる中で左連「中枢」としては、この時期このような政治色の薄い商業文芸誌を利用して合法的に自らの勢力の温存を図る必要があった。そのため、鄭振鐸のような人脈的にも左連と近い非左連文壇人を表にたてながら実務レベルでは左連系の人材を注入していったのである。当時左連には加入していなかったものの左連の立場に近い位置にあった黄源も『文学』の編集実務に携わった一人であった。その黄源は以下のように回想している。

傅東華は名義上は主編であったが、彼は当時商務印書館の中学・高校二系列の国語教科書の編集に全力を投入していたため、『文学』の実際の編集業務は私の手にゆだねられていた。尊敬する先輩である茅盾は暗にほのめかしただけであったが、私は断固とした決意で編集にのぞんだ。左連のいかなるメンバーからの原稿も一視同仁としたのである。当時国民党の審査を通らなかった作品以外は、質的に発表できるのに私たちの圧力によって発表しなかった左連のメンバーの作品は、いま思い出した限り一編もなかった。⁴⁶⁾

この黄源の回想全体はかなり割り引いて考えねばならないものではあるものの、やはり『文学』が左連の文学者の一つの障地となったことは疑いがないところであろう。そして、そのため『文学』は左翼思想にシンパシーを抱いていた読者も多く獲得した。ちょうどこの時期左連に加入した呉強は『文学』創刊当時の模様を次のように述べてい

る。

『文学』が創刊された日、環龍路にある生活書店店頭販売部には、百人近くが我先を争って買おうとしており、人の頭の上から手を伸ばしてお金を渡し雑誌を受け取っていた。一時の『文学』ブームといったおもむきであった⁷⁰⁾。

また、『文学』は読者拡大術に秀でた生活書店の発行であったため、10万部を越える発行部数を誇る『生活』に大々的な広告が打たれるなど積極的な宣伝も展開されていた。その結果創刊号は最初に印刷した3000部をあっという間に売り切り、さらに4度重版されるなど好調な売り上げをあげたとされる⁷¹⁾。多くの文芸愛好者・左翼シンパに歓迎される中で、『現代』と並ぶ文芸雑誌として文壇での地位を固めていったのである。このように1932年から1934年前半にかけての上海文壇の「中心」は『現代』一極から『現代』・『文学』二極で動いており、相互に対立しながらそれぞれ読者を食い合う形で張り合っていたといえるであろう⁷²⁾。

Ⅲ. 二つの「作家連合」と「自由人論争」

1932年後半から1934年前半にかけて作家の「結集点」としての文壇の「中心」にあったのは『現代』と『文学』の「二極」であったが、この「二極体制」が成立する以前の上海事変前後から左連・非左連多くの作家を巻き込んで作家の「連合」をめぐる争いが発生していた。そして、それが表面化したのが「自由人」・「第三種人」をめぐる論争であり、この論争が『現代』と『文学』「二極」と接点を持ちながら展開していくことで、文壇の勢力図に大きな変化がもたらされていったようである。以下では「作家連合」の動向に焦点を当てながらその変化の流れを追っていこう。

ことの発端は上海事変直前の1931年12月、陳銘

枢が経営を握り王礼錫を総編集とする神州国光社から1910年生まれの新鋭批評家胡秋原を主編として『文化評論』が創刊され、創刊号に掲載された胡秋原「阿狗文学論」などによって文壇の中で独自の立場を打ち出していったことに始まる。胡秋原が「阿狗文学論」において打ち出した立場は左連とは異なる位相から国民党の文化政策・「民族主義文芸」を批判するものであり、左連に対する批判は論理の傍流で、むしろ国民党系の「民族主義文芸」批判において左連と連動することに重点が置かれていたといえるだろう。これは同時並行して展開されていた王礼錫による「中国著作者協会」創設の動きと連動するものであった⁷³⁾。王礼錫は1931年4月『読書雑誌』を創刊⁷⁴⁾、自ら編集にあたり当時のハイブラウな雑誌の中ではかなりの売れ行きを得て知識人の間に相当の影響力を持ち始めていた。王礼錫はその力を文壇へと向け、新たな作家の「連合」である「中国著作者協会」の創設を計画していたのである⁷⁵⁾。この「中国著作者協会」の方針は必ずしも左連を排除するものではなく、「作家の代弁者」としての立場を強調し国民党の文化政策に対抗しようとする点を以て「連合」の機軸とするものであった。胡秋原をイデオロギーとする『文化評論』の姿勢は、このような「中国著作者協会」の立場を反映するものであったのだ。

1932年1月17日には「中国著作者協会」の「発起集会」が開かれ、「著作者協会」創設の動きは徐々に具体化されていった⁷⁶⁾。この会合に参加したのは王礼錫・胡秋原・陳望道あるいは丁玲・馮雪峰・樓適夷・姚蓬子・鄭伯奇・穆木天・陳子展・沈起予・施存統など⁷⁷⁾、1932年1月11日『文芸新聞』第44期に陳望道が「關於著作者協会」を発表した孫師毅が呼びかけたこともあって左連のメンバーも多数参加している⁷⁸⁾。会議では「言論・出版・集会・結社の自由」・「著作者への圧迫の反対」・「著作者への報酬の増加」・「ファ

シズム政策への反対」という4点を基調として、作家の権利を守っていくという線で「連合」が企画された。それまでの文壇における最大の「作家連合」である左連をも取り込みながら自分たちの勢力圏に吸収していく、そのために打ち出されたのが反国民党路線であり、「作家擁護」路線であったのだといえるであろう。会合の様子は『文芸新聞』第46期にも大々的に掲載され、おそらく水面下での齟齬はあったもののその枠組みはある程度承認されたようである。王礼錫の「連合工作」はいったんは成功するかに思われた。

しかし、この「連合工作」は上海事変の勃発によってあっさりと打ち破られた。これによって内部の齟齬が完全に顕在化してしまったからである。それが如実に浮かび上がったのが上海事変に対応して発せられた「中国著作者為日軍進攻上海屠殺民衆宣言」（以下「救国宣言」と略称する）の採択の場のことであった⁸⁹。神州国光社グループは上海事変に対応して1932年2月7日から上海の文壇人を召集して会議を開催し、まず執行委員に王礼錫・胡秋原・陳望道・丁玲・馮雪峰・沈起予・施存統らを擁する「中国著作者抗日会」を成立させ、その後4日間の討議を経て10日付けで胡秋原・王礼錫を始め巴金・趙景深などの非左連作家、あるいは丁玲のような左連作家を含める形で「救国宣言」の採択へ持ち込んだ⁹⁰。左連側はこの会議でヘゲモニーを握ることを目指して幾度となく異議を提出しそのために会議が長引いたようであるが、結果的にそのような異議は否決され左連の側も署名せざるを得なくなったのであった。ここに「救国宣言」が王礼錫・胡秋原を中心としたいわば非左連勢力の結集によって左連を押し切る形で成立したことは、文壇の勢力図を考える上で大きな意味を持っていた⁹¹。それは「左翼」による「連合」に対抗しうる作家の「連合」勢力が左連を飲み込む形で着々と勢力を固めつつあったことを意味し、その意思が左連の意思とは必ずしも

一致するものではないこと、さらには結果的に左連の意思と対立する方向に向かう可能性があることが明らかになったことを意味したからである。その点が明白になったことによって、これ以降左連側と王礼錫・神州国光社側の間で作家の「連合」をめぐる長期に渡るヘゲモニー争いが展開されていったのであった⁹²。

このヘゲモニー争いの動きが奇形的に表面に浮かび上がる形で現れたのがいわゆる「自由人論争」・「文芸自由論争」である⁹³。胡秋原は『文化評論』第4期の「勿侵略文芸」において「自由人」であることを標榜するとともに、『読書雑誌』第2巻1期の「錢杏邨理論之清算与民族文芸理論之批評」では「マルクス主義理論」を「擁護」する立場において発言していることを表明するなど微妙な位置をとりながら自らの立場の「理論武装」をしていったが、これに対して左連の側は瞿秋白・馮雪峰が『文芸新聞』誌上を中心として「応戦」する立場をとり、結果的に両者の間で「自由人」をめぐる「論争」へと展開していったのである。論争は表面的には「理論闘争」の形を取りながらも、その背後にあったのは王礼錫・神州国光社と左連の「作家連合」・知識人獲得のためのヘゲモニー争いであった。そのため、胡秋原は一貫して左連に対して曖昧な立場をとり、左連の側でも声高な論調を避けて「冷静」に対応していったのであった。

ところが、このように神州国光社系と左連系勢力のヘゲモニー争いの中に入って「第三種人」を標榜し、自らの立場を表そうとするものが現れた。杜衡（蘇汶）である。杜衡は1932年7月『現代』第1巻3期に「關於“文新”与胡秋原的文芸論辨」を發表、ここにおいて「自由人論争」は「第三種人」の問題を含みこんで拡大し、三つどもえの論争へと変化するきっかけが生まれていった。しかし、実際杜衡の当初の意図は必ずしもいわゆる「第三種人論争」を引き起こすこと自体にはなか

った。この文章を「読む」ためにはやはり神州国光社・「自由人」側と左連側の「作家連合」をめぐるヘゲモニー争いが底流にあることを押さえておかねばならないだろう。杜衡の議論の根本にあるのは神州国光社・「自由人」側と『文芸新聞』・左連側の「作家連合」をめぐるヘゲモニー争いをふまえた上で、その争いを半ば揶揄する観点からその党派争いに巻き込まれていく「第三種人」としての「作家」の立場を示す姿勢であった。すなわち、ここでの「第三種人」は基本的にはヘゲモニー争いのいわば「副産物」・「おまけ」にすぎなかったのである。

したがって、この論争の文脈の中では左連側としてはあくまで「自由人」との関係の中で「第三種人」をとらえようとする考え方が主流となっている。瞿秋白や周揚はそれを「自由人」側のものとして徹底的に反論していったのに対し、1920年代後半杜衡と活動をとともにしてきた馮雪峰は当初は暗黙のうちに後には公にそれを左連側に丸め込んで「自由人」側を追い込んでいく方策を採った。左連側としては「自由人論争」決着以前においては「第三種人」概念あるいは「作家の立場」がどうのこうのとを過度に「深読み」する必要はなく、神州国光社・「自由人」側との比較の上で左連側に理のあることを主張することによって「作家連合」のヘゲモニーを掌中に収めさえすればよかったのである。また、逆にそこで過度に事態を複雑化させたり、感情的になって「中間派」文化人の支持を失うようなことになってはまずかったのであった。

そして、このような左連の方針は成功した。現実には胡愈之のような「中間派」文化人の支持が左連側に集まっていく中で神州国光社・「自由人」側が撤退し⁸³⁾、「自由人論争」は1933年初めには基本的には終結を迎えたのであった⁸⁴⁾。そして、この「自由人論争」の終結は自動的に1932年からのヘゲモニー争いの終結をも意味した。論争におい

ても文化人の取り込みにおいても結果として神州国光社側の「敗北」であった。1933年3月『社会新聞』第2巻第21期には以下のような記述がある。

昨年の上海事変以後、灰色の文化運動が一時期極めて盛んになった。当時は雑誌が多かっただけでなく、彼らは知識労働者協会・著作者協会・著作者抗日連合会など多くの作家団体を結成し、一時期は一切を請け負う勢いであって、一貫して意気盛んであったプロレタリア作家でさえも灰色作家を前にして頭を垂れざるを得なかったのである。しかし、現在では情勢は変化した、灰色文化運動は次第に没落しているようで、『星期学灯』にはまだ王礼錫先生やら神州国光社やらが繰り返してやってくるものの、このような露骨なからくりはすでに強弩の末となっている⁸⁵⁾。

ここでの「灰色」文化運動が「赤」でも「白」でもない王礼錫・神州国光社路線を指すことはいうまでもないであろう。

しかし、この論争は神州国光社側の「敗北」であったとはいえ、左連の完全「勝利」ということにはならなかった。神州国光社系・左連系双方が攻撃対象としていた国民党の弾圧によって1933年に入ると組織体としての左連は完全に表舞台から姿を消さざるを得ない状況となっていったからである。そして、「自由人論争」はこのような勝者なき戦いを引き継ぐ形で「第三種人論争」へと劇的な変質を遂げていったのであった。

IV. 「第三種人論争」の変質と左連の分裂

先に左連側は基本的には「自由人論争」決着以前において「第三種人」概念あるいは「作家の立場」に関して過度に「深読み」しようとはしなかったと述べたが、神州国光社側の現実的な敗色が濃厚となり「自由人論争」が幕をひこうとしてい

た1932年後半になるとそのような「左連としての意図」を越えて自らの立場で論争に参加するものが現れてきていた。これは論争の場として杜衡の参加を皮切りに『現代』誌上が大々的に提供されるようになったことと呼応するものであるといえる。文壇の「中心」たらんとする「中立的」なメディアの参加によって論争が一気に「一般化」していった⁹⁴。そして、結果的にその中で1932年11月『現代』第2巻1期に魯迅が「論“第三種人”」を発表しこの論争に参加していったことが、論争を変質・長期化させる大きな要因となったようである。魯迅の論争への参加によって論争が「理論」色を帯びることとなり「内容」の問題へと転換していくことになった。「第三種人」の問題は杜衡が当初提出した「左連側でも神州国光社側でもない作家」の立場の問題から「赤でも白でもない知識人」の問題へと転換していったのである。

そこに1933年1月楊邨人が「離開党政党生活的戦壕」を『読書雑誌』第3巻1期に発表したことが論争のさらなる転換と混乱に一層拍車をかけることになった。楊邨人は続いて2月にも『現代』第2巻4期に「掲起小資産階級革命文学之旗」を発表、これを受けた韓侍桁の「“掲起小資産階級革命文学之旗”」（『読書雑誌』第3巻6期，1933年6月）も含めてそこに左派陣営内部における「転向」問題が浮かび上がってきたからである⁹⁵。また、それと同時期に魯迅が「又論“第三種人”」（『文学』第1巻1期，1933年7月）を発表し『現代』の対抗勢力である『文学』側から「第三種人」の問題が蒸し返されたことで杜衡の再度の「参戦」が促され、結果的に『読書雑誌』・胡秋原を通じる形で杜衡と楊邨人・韓侍桁の「第三種人」連合戦線が成立することとなっていった⁹⁶。そして、それによって1933年後半以降「第三種人」の問題は左連内部の「先鋭化」に対する問題・「転向」問題を含みこんだ文学者の「内実」の問題として複雑化し、論争が魯迅グループと杜衡・楊邨人・韓侍桁

グループの対立を中心とする極めて「内向き」のものへとさらに変質していったのである。この変質は事態の「泥沼化」を招き、結果的に左連内部の対立を激化させていったのであった。

さらに、論争が変質し転換していったこの時期から魯迅は杜衡だけでなく施蛰存・杜衡が編集する『現代』を目の敵とするようになっていった⁹⁷。魯迅は1933年10月には施蛰存「『莊子』与『文選』」（『申報・自由談』1933年10月8日）を「“感旧”以後（上）」（『申報・自由談』1933年10月15日）で攻撃、さらに『中国文芸年鑑』の「鳥瞰」への攻撃も含め、馮雪峰を振りきる形で杜衡と施蛰存を「一体化」して批判する方針をとっていったのである⁹⁸。この時期魯迅は施蛰存が国民党の「事前検閲」導入の問題で国民党に「献策」をしているという情報を信じ（あるいは信じ込もうとし）⁹⁹、さらに1934年6月に国民党中央宣伝委員会の図書雑誌審査委員会が設けられた際には杜衡がその委員に加わったという「噂」も信じようとしていたようである。すなわち、魯迅は施蛰存・杜衡ら『現代』側を「国民党の手先」と見なし、その論理の上で「第三種人」の問題と「一体化」して攻撃を加えていったのであった。ここに『現代』は「第三種人」側の「根拠地」という形で完全に論争に巻き込まれていったのである。

しかし、実際施蛰存は先にも述べたように文壇の中で比較的「稀」ともいえる「中立的」な人物でこのような「献策」の事実を強く否定しており、杜衡も図書雑誌審査委員会には加わっていないことが明らかになっている¹⁰⁰。さらにいえば楊邨人も国民党組織との関わりは薄く、韓侍桁は左恭とのつながりから『創化』の編集に携わったもののそれは左恭が地下黨員であったことが大きな要因で国民党への協力を意図したものではなかったようだ¹⁰¹。そもそも杜衡・楊邨人・韓侍桁はいずれも1920年代後半から左翼の文芸界の「日のあたる道」を歩いていた左派陣営の若手のホープであっ

た。杜衡は水沫書店を基盤に積極的な翻訳活動を行っており、楊邨人は元は太陽社の「花形作家」、韓侍桁も批評家として創造社の成仿吾・太陽社の錢杏邨と並び称されていたのである⁴³。彼らは左連にもいったんは加入しており左翼文学者の「経歴」としては申し分がなかったのだ。そのような彼らが左連を離れたのはなぜなのか。杜衡・戴望舒・韓侍桁の左連離脱の理由は、韓侍桁によればある会議で文学を知らない現場の工作者が作家に作家の生活をなげうって労働民衆の間で学ぼう勧告し、同時に自分が現場の仕事を抜けて筆をとればすぐに革命的意義のある作品がかけると吹聴したことに嫌気が差したことが原因であったようだ⁴⁴。楊邨人の離脱の理由も細かな状況こそ異なれど同様であった⁴⁵。すなわち、彼らの左連からの離脱は左連内部のある種の「公式主義」批判の帰結であって、必ずしも彼らが「左翼思想」から離脱したことを示すものではなかったのである。したがって、彼らは根本的には左翼思想には一定のシンパシーを抱いていたわけであり、国民党と結ぶことは後年の「結果論」は別として当時としてはあり得なかった。そして、それにも関わらず左連と対立している理由は、突き詰めれば左連内の「人物」や「雰囲気」が気に入らなかったというところに尽きるわけであり、それだけに彼らの左連に対する屈折した「恨み」は深かったといえるのである。

このように「第三種人論争」は1933年後半になると「内部」の対立へと変質をとげ、魯迅が杜衡・楊邨人・韓侍桁グループに国民党の「幻影」を見て攻撃し、反対に杜衡・楊邨人・韓侍桁グループも左連への一種の「近親憎悪」感を全面に出しながら魯迅の背後に左連を見て攻撃を加えていくという状況へと変わっていった。すなわち、内輪の「骨肉」の争いとなっていた上に誤解が誤解を生みそれが重なっていったのだ。したがって、内容は杜絶なものにならざるを得なかった。「理

論的」な論争と並行して、杜衡・楊邨人・韓侍桁グループの『文化列車』や魯迅グループが刊行する「地下」あるいは「半地下」刊行物を中心に双方の間では激しい「泥仕合」が繰り広げられていったのである⁴⁶。また、『現代』という「中心」的文芸誌の関与によってそこでの言説がいつでも「増幅」され「拡散」していく構造となっていたことは、論争の当事者にとって大きな心理的圧力をあたえることとなっていたといってい間違いないだろう。

さらに、論争が変質をとげていたこの時期、左連内に結成以来一貫して潜在していた魯迅・茅盾系と創造社・太陽社系対立が魯迅グループと周揚・夏衍・陽翰笙・田漢など共産党上海中央局文化工作委員会（「文委」）系グループとの表面的な対立へと変形しかけており、特に1933年6月馮雪峰の江西行きの後は魯迅グループと「文委」系の人脈が多くを占める左連「中枢」との関わりは薄くなっていた。その中で、杜衡・楊邨人・韓侍桁グループの矛先が魯迅グループを乗り越えて左連全体へと向いていったことで、左連内部では心理的な動揺がかきたてられ、一気に組織の「分裂」へと進んでいくことになっていったようだ。その一つの大きなきっかけとなったのは何家槐の「盗作」事件であった⁴⁷。

この事件は左連の若手メンバー何家槐が徐軫蓬の小説を「盗作」しているという「噂」が1933年の夏に儲安平・韓侍桁を通じて林希雋へと伝わり、楊邨人・韓侍桁・林希雋らが何家槐を攻撃したことで顕在化したものである。何家槐は当初は「盗作」の事実を否認したため何家槐の属する暨南大学の学長であった胡適までをも巻き込む大論争へと発展していったが、結局「盗作」疑惑の当事者であった徐軫蓬自らが「代作」したことを認めたため何家槐の「罪」が明らかになっていったのであった。魯迅グループ・左連「中枢」側とも事態を何家槐の個人的な問題として収束させよう

としていったものの、明らかに「非」が何家槐側にある中であって、彼への個人的な不信感が「内部」の他グループに対する不信感と結びつく方向へと働く要素を有していたことは間違いない。また、1934年6月から『社会月報』に連載された楊邨人の「赤区帰来記」が左連内部にあたえた心理的影響も大きかったようである。この文章は現実の人物になぞらえられる登場人物設定であったため、これによって現実に逮捕者が出るなど左連内部に戦々恐々としたムードが漂うこととなったからである⁴⁷⁾。1934年前半の杜衡・楊邨人・韓侍桁グループの攻撃は確実に左連「中枢」に心理的なダメージをあたえていたのであった。

しかも、このような杜衡・楊邨人・韓侍桁グループに相對する左連「中枢」の側は同時期極めて厳しい状況に置かれていた。1933年以降左連への弾圧はますます厳しくなり、丁玲・潘漠華・樓適夷・姚蓬子などの逮捕に続き、1934年7月には中国詩歌会の穆木天・任鈞あるいは狂流文学社の劉流といった小組織の幹部から逮捕者が発生、1935年2月陽翰笙・田漢のような「中枢」に近い人に到るまで逮捕が進んでいく背景が生まれていった。すなわち、「転向」による当局への内部情報の漏出の問題が常に彼らを脅かしていたのである。この時期は「転向」・裏切りも日常茶飯事だったようで、そのため小谷一郎氏も指摘しているように「左連内部は、互いに疑心が生じやすい状況にあり」、「個人あるいはグループごとの対立が目立ちはじめていた」のであった⁴⁸⁾。

このような中浮上した「胡風転向疑惑」は左連「中枢」グループと魯迅グループの溝を決定的なまでに深めていった⁴⁹⁾。「胡風転向疑惑」は1934年7月に逮捕された穆木天の9月の出獄と並行する形で、左連「中枢」に当時南京で『時事類編』の編集に携わっていた胡風が国民党のスパイであるという「噂」が流布していった事件である。実際は胡風が国民党のスパイであるという事実はなく魯

迅も胡風の「潔白」を信じていたが、夏衍・陽翰笙・周揚・田漢ら左連「中枢」グループが魯迅に胡風を退けるように忠告に訪れたことで双方の認識のズレが露呈し、亀裂が深まっていったのであった⁵⁰⁾。この「胡風転向疑惑」も「噂」の発生源は穆木天説を始め諸説あるが、これを大々的にあおり立てたのが当時胡風と同じく中山文化教育館に勤務していた韓侍桁であったことは間違いないようだ。それにさらに追い打ちをかけるように、楊邨人の「赤区帰来記」を受ける形で1934年末に田漢が魯迅を「批判」する文章を執筆、後に弁明したもののこのような相次ぐ事態によって魯迅の左連「中枢」への不信感は決定的となっていたのである⁵¹⁾。ここに、杜衡・楊邨人・韓侍桁グループの攻撃の結果として、彼らを「触媒」とするようにして「旧左連勢力」は魯迅グループと陽翰笙・周揚・夏衍を中心とする左連「中枢」、そして杜衡・楊邨人・韓侍桁グループの三派へと完全に分裂していったのであった。作家の「連合」をめぐる発生した「自由人論争」は「第三種人論争」へと変質し、帰結したのは左連の「分裂」だったのである。

V. おわりに

以上「自由人論争」と「第三種人論争」を軸に「作家連合」をめぐる動きを追ってきたわけであるが、今後の展望のためにも左連「分裂」後の状況にもう少し触れておきたい。

夏衍・陽翰笙・周揚・田漢などを中心とした左連の「中枢」は、このように1934年後半から1935年にかけて魯迅グループとの亀裂が拡大していく中で極めて厳しい状況に直面していた。自ら文芸雑誌を発行することは難しく、若手作家が確保したメディアを中心に細々と活動が続けざるを得なくなっていたからである。特に1935年2月に陽翰笙・田漢らが逮捕され「転向」したことによって組織はほぼ壊滅的な打撃を受け、以後系統だっ

た活動はほぼ不可能になったといってもいいであろう。あとは、個人的なつながりが全てだったのである。残存した「中枢」グループは夏衍と周揚を中心に沙汀・艾蕪あるいは徐懋庸・何家堯・周立波⁸⁹などが主要なところであった。彼らは崔万秋が編集し国民党から資金が流れていたともされる『火炬』や、徐懋庸が編集にあたっていた『時事新報・毎週文学』の活動などによって細々の表舞台と接点を持ち続け、周揚・周立波の「国防文学」の提唱などによってわずかに人目を引いていたにすぎず、茅盾などと連絡を取りながら左連「解散」を進めるなど新たな展開を探らざるを得なくなっていった。基本的には結果的に左連「解散」後の1936年6月『文学界』・『光明』が創刊され表舞台に有力な「陣地」を得るまではほぼ地下に潜在することを余儀なくされたのである。

また、杜衡・楊邨人・韓侍桁グループは1935年5月に『星火』を創刊し一時期は大きな注目を浴びたが、活動費の確保に苦勞し、新人発掘では成果は挙げたものの大々的な活動は難しくなっていた⁹⁰。張露微が主編を務める『文学導報』のようにこの杜衡・楊邨人・韓侍桁グループに近いと目されるメディアは他にもあったようではあるが、結果的には次第に文壇での影響力を失っていったのである。

このように左連を起点とする三派のうち二派の活動が停滞する中で残る一派、魯迅グループは胡風の「転向問題」が発生した後も左連「中枢」と距離をおきながら独自の活動を活発に継続していった。1935年2月には生活書店から『訳文』を創刊、黄源・黎烈文が中心となって編集にあたり出版界で比較的軽視されがちであった翻訳事業を作家自らの手で切り開いていった。『訳文』は「訳文叢書」の刊行をめぐるトラブルから生活書店の黄源はずしの要請を魯迅が蹴る形でいったんは停刊へといたったものの⁹¹、それと同時期に文化生活出版社と接近し事業の継続を果たしている⁹²。

また、趙家璧・鄭伯奇が関わっていた良友圖書出版公司から1935年2月に鄭伯奇の主編で『新小説』が創刊されると⁹³、魯迅は孟十還を通じて寄稿していった。文化生活出版社を通じての巴金との接近あるいは黎烈文・孟十還などとの関係に象徴されるように、この時期魯迅グループは非左連作家と積極的に連携し、そこに活路を見いだして『文季月刊』からさらには『作家』・『中流』・『訳文』での活動へと展開していったのである。同時に魯迅グループには胡風・蕭軍・蕭紅・黄源・周文・聶紺弩・葉紫など有力な若手が多数集まっており、彼らも『木屑文叢』から『海燕』・『夜鶯』・『文学叢報』まで立て続けに創刊するなど、積極的な活動で全体を盛り上げていったのであった。そして、こうした勢力図の変化を引き継ぎながら事態は「国防文学」と「民族革命戦争の大衆文学」という「二つのスローガン」をめぐる「中枢」グループと魯迅グループとの間の論争へといたっていくのであった。

ここからもわかるように、左連は内部の「分裂」以降それぞれのグループが非左連作家と積極的に連携を図っていくことになり、それとともに文壇全体で大きな「再編成」の流れが発生していた。また、この時期は『現代』・『文学』「二極体制」の崩壊もあってメディアの面でも上海・南京・北平を巻き込んだ大規模な転換が起こっている。したがって、「二つのスローガン」をめぐる論争を含めたさらなる事情を語るためには、左連内部の問題だけではなく民族主義文芸の動向・『新時代』や『小説』など上海の中小文芸誌の活動・「小品文・散文・雑文」系メディアの拡大の流れ・北平文壇の「再生」の動きなど非左連作家のこの時期の活動全体に触れていかねばならないだろう。そのような点を含め、今後本稿のような論考を積み重ねていくことによって立体的な文壇像を構築していくことを自らの長期的な課題としたい。

[注]

- (1) 本稿において「1930年代」とは1932年から1934年を中心としその前後2年を指す概念として便宜的に用いたものである。したがって、実際の「1930年代」あるいは「1928年から1937年抗日戦争期以前」を指す用法とは異なっている。また、当時は「新文学」の側の「作家集団」＝「文壇」といわゆる「鴛鴦蝴蝶派」の側の「文壇」とがパラレルな関係で存在していたが、ここではそのうちの「新文学」の側の「文壇」のみを扱うものとする。したがって、本稿で「文壇」といった場合そのようなものを指す。
- (2) この時期の左連の活動あるいは民族主義文芸運動をはじめとした他の「組織的」な活動に関しては稿を改めて論じていきたい。
- (3) 総合雑誌の場合は『東方雑誌』の休刊の間隙を縫う形で、申報社から『申報月刊』が創刊されている。また、1933年1月の中華書局が『中華書局図書月刊』を停刊にして『新中華』を創刊したのもおそらく『東方雑誌』の休刊と関係があると思われる。このような総合雑誌や「小品文・散文・雑文」系メディアの役割に関しては別稿で論じたい。
- (4) 施蛰存「現代雜憶」『沙上的脚迹』遼寧教育出版社、1995年、28頁。『沙上的脚迹』からの翻訳に関しては青野繁治訳『砂の上の足音——或る中国モダニズム作家の回想』（大阪外国語大学学術出版委員会、1999年）を参考としている。『現代』はしばしば「第三種人」的立場に立つ雑誌として捉えられてきたが、近年多くの論者が指摘しているようにそれはこの雑誌の後期における性格の一側面を反映していることは間違いないとしても、少なくとも『現代』の創刊の意図と創刊当初の文壇的な位置づけとは異なっているといえるであろう。
- (5) 施蛰存「我和現代書局」前掲書、61頁。『出版月刊』（第6期、1930年6月、39-40頁）でも現代書局は『拓荒者』・『大衆文芸』を停刊したことによって数千人の定期購読者を失い営業的に大きな打撃を受けただけでなく、左連側の信頼も失ったとされている。また、現代書局には1931年4月『現代』と比較的近い意図を持って葉靈鳳を主編に『現代文芸』を創刊したものの、2期出したのみで夭折した経験もあった。
- (6) 張静廬『在出版界二十年』上海雜誌公司、1938年、149-150頁。現代書局は1927年洪雪帆らによって創設され、創設時より文芸書・文芸雑誌を中心とした出版活動を行っている。1931年に改組されて以降、張静廬は特に経営に深く関わるようになっていた。
- (7) 『現代』創刊号、1932年5月、2頁。
- (8) 張静廬の回想によれば1万4000～1万5000部（前掲『在出版界二十年』、150頁）、施蛰存の回想によれば1万部（「現代雜憶」前掲書、53頁）。
- (9) 施蛰存の回想によれば魯迅の原稿は馮雪峰か内山書店の配達係を通じて現代書局の編集室まで届けられていたとされる（施蛰存「關於魯迅的一些回憶」前掲書、114頁）。このように、魯迅と『現代』との関係を考える際には、施蛰存・杜衡・戴望舒のかねてからの親友であり魯迅の「側近」でもあった馮雪峰の役割を見落とすことはできないだろう。馮雪峰と施蛰存・杜衡・戴望舒の関係は前田利昭「第三種人」論争における馮雪峰（『東洋文化』56、1976年）に詳しい。また、同論文以後発表された回想では施蛰存「最後一個老朋友——馮雪峰」（前掲書）に多少新しい記述がある。
- (10) 施蛰存と巴金の関係については朱嬰「憶往懷旧」に記述がある。『往事如煙』上海古籍出版社、1999年、6、42頁。周索非（索非）は1900年生まれ。1927年から開明書店に勤務していた。その開明書店を通じた関係に加え、周索非はエスペランティストでもあったことから、この時期巴金との間に密接な往来があった。

- (11) 黄源「左連与《文学》」『左連回憶録』中国社会科学出版社, 1982年, 479頁。
- (12) 『文学』創刊号, 2頁。
- (13) 施蛰存「我和現代書局」, 前掲書, 63-64頁。
- (14) 施蛰存「震旦二年」, 同上書, 10頁。
- (15) 阪口直樹『十五年戦争期の中国文学』(研文出版, 1996年, 123頁)が『文学』を『小説月報』の後身とする説に否定的な中島長文「小さな椅子から」『中国の一日』(平凡社, 1984年)の見解に反論する形で指摘しているように、『文学』はあくまで『小説月報』の「後継誌」として企図されたものであり, またさらにいえば読者の側でもそのように受け取った人が少なからずいたことは間違いない。池田孝『現代支那の文学』(東亜研究会, 1935年, 69頁)にも『文学』を『小説月報』の後身とする見解が示されている。編集委員会に名を連ねた顔ぶれだけからもその一端は看取できるだろう。なお, 編集委員会の中で徐調孚だけは比較的知名度が低いようであるが, 徐調孚は商務印書館に勤務していた時代には『小説月報』の校正を務め, また開明書店に移ってからも『中学生』などの雑誌や書籍の刊行を裏で支えた文壇の影の有力者であった。
- (16) 黄源「左連与《文学》」, 前掲書, 479頁。
- (17) 「回憶与感想」『左連記念集1930-1990』百家出版社, 1990年, 80頁。同じ呉強の「左連半年生活回憶」, 前掲『左連回憶録』にも同様の記述が見られる, 333頁。
- (18) この間の事情は超暁恩「三十年代生活書店的推广宣伝工作」(『出版史料』第11期, 1988年3月)による。
- (19) 『現代』の発行部数は『文学』創刊以後停滞, 第4巻1期「狂大号」の7000部を最高に下降線をたどっていったが(施蛰存「現代雜憶」, 前掲書, 54頁), それでも1934年の前半までは相対的にかなりの位置を占めていた点には変わりがない。
- (20) 胡秋原自身は原稿料の残りで自分からこの雑誌を始めたと後に綴っている(劉心皇『中国文学史話』正中書局, 1971年)。胡秋原自身の神州国光社グループとの関係に関しては胡秋原側の文脈からなお議論していく余地はあるようだが, その発行元を考えればやはり王礼錫の方針との何らかのつながりを考えるのが自然であろう。
- (21) 王礼錫・胡秋原を中心とする神州国光社グループに関しては佐治俊彦「胡秋原覚え書き」(『東洋文化』56, 1976年), 同「胡秋原と三十年代「中間派」知識人」(『魯迅と同時代人』汲古書院, 1992年), 同「『讀書雜誌』の人々の見た中国の明日」(『転形期における中国知識人』汲古書院, 1999年)を参考としている。
- (22) 莽令「王礼錫的転変三部曲」(『現代史料第4集』海天出版社, 1935年)では王礼錫が相当多額の金銭を利用して文筆家を取り込んでいったという記述があるが, それが事実であるならば作者の「連合」の意図のもとに大規模な文筆家獲得戦略を行っていたといえるだろう。佐治俊彦, 前掲「胡秋原と三十年代「中間派」知識人」が指摘しているように, その背景としては陳銘枢が社会民主党を結成する布石として知識人の連合を形成しようと考えていたことも考慮せねばならないが, 本稿ではその問題に関しては保留する。また, 『讀書雜誌』誌上においてこの時期活発に展開されていた「中国社会史論争」に関しても本稿では扱わない。
- (23) 「中国著作者協会」に関しては本文であげた資料以外では前田利昭, 前掲「「第三種人」論争における馮雪峰」(前出)・寛文生「最近のわが国における“30年代中国文学研究”をめぐって」(『立命館大学』373・374, 1976年)を参考としている。
- (24) 1932年1月25日の『文芸新聞』第46期より。1932年1月18日の『文芸新聞』第45期では「発

起人談話会」と銘打っている。

(25) この時期の復旦大学教授であった陳望道は神州国光社とも近い立場にいたようである。陳望道夫人も神州国光社の『微音』の編者であり、また胡秋原も陳望道と面識があったことから、神州国光社側と左連側の間である種の「パイプ役」となっていたともいえるだろう。

(26) 「救国宣言」に関しては王礼錫『戦時日記』（神州国光社、1932年）及び阪口直樹「二つの“救国宣言”をめぐって」（『野草』46、1990年）、鈴木将久の博士論文「一九三〇年代上海におけるメディアと文学」（未発表）を参考としている。

(27) この「救国宣言」採択をめぐるとの詳細に関しては資料による相異が激しいため再検討の余地があるが、大筋では本文の通りである。

(28) この「著作者抗日会」成立に先立つ2月4日に「上海文芸界向全世界無産階級和革命文化団体及作家書」も発表されていた。こちらには「救国宣言」の中心となった王礼錫・胡秋原・陳望道ら神州国光社側も署名しているものの魯迅・茅盾など左連の「大家」や周揚・夏衍さらには郁達夫・葉聖陶・胡愈之なども署名しており、むしろ中心は魯迅・茅盾などのグループにあったようである。この二つの「救国宣言」に関しては阪口直樹、前掲「二つの“救国宣言”をめぐって」でも考察が加えられているが、実際のところは不明な点も多くその詳細の解明は今後の課題である。

(29) 上海事変直後、当時神州国光社の印刷所に勤めていた周立波をスト委員会の委員長として大規模なストが決行されていた（周揚「關於周立波同志的一些情況」『周立波研究資料』湖南人民出版社、1983年）。これには共産党の地下組織も動いていたとされており、さまざまな立場から神州国光社の計画を切り崩そうという動きが行われていたと見るべきであろう。

(30) 「自由人論争」・「第三種人論争」に関しては『三十年代“文芸自由論辨資料”』（上海文芸出版社、1990年）、『文芸自由論辨集』（現代書局、1932年）、竹内実「“第三種人”をめぐる論争」（『東洋文化』41、1966年）、前田利昭、前掲「“第三種人”論争における馮雪峰」、丸山昇「魯迅の“第三種人”観」（『東洋文化研究所紀要』97、1985年）、同「施蛰存と魯迅の「論争」について」（『中国文学論叢』20、1995年）などを参考としている。

(31) いわゆる「自由人」側は『文化評論』停刊以後驚くほど沈黙を守っている。それにかわって、1932年10月『現代』第2巻1期に神州国光社とも左連とも近い陳望道が「關於理論家的任務速写」を発表、議論を収めようとするような動きも現れていた。

(32) 現代書局は1933年3月に、前掲『文芸自由文芸自由論辨集』を出版しこの論争を総括していったが、これは「自由人論争」の集結を象徴する出来事であるといえる。1933年に入っても1・2月に『現代文化』誌上などで「自由人」に対する攻撃はあったものの、このような動きはいわば「局外者」の若手左連系作家が事情を知らず乗り込んだもので本筋とは離れるといえるだろう。北方左連の介入も同様である。北平における「自由人論争」・「第三種人論争」の認識は、1932年末の魯迅の講演の影響を強く受けたものとなっているようで、「自由人論争」と「第三種人論争」を区別なく一連の流れでとらえようとする傾向が全般に支配的であるようだ。

(33) 水手「左翼文化運動的台頭」、引用は『左翼文芸運動史料』（南京大学学報編集部、1980年、304・305頁）による。

(34) 『現代』にとってこの論争への参加がいわば雑誌の「第三種人」雑誌化を招く契機を作ることになったわけであるが、そのようなりスクがあったにも関わらず『現代』がこの論争に参加

していったのは基本的には「販売戦略」という側面が大きいようだ。「論争」というのは出版社にとっては読者獲得につながるため、また作家にとっては原稿料獲得につながるため基本的には非常に「実利のある」ものであった。『現代』の編者施蛰存としても、当時文壇の真ん中で綱引きをしていた左連側と神州国光社側の争いに首を突っ込むことによって雑誌の販売を促進するとともに、名実ともに「文壇の中心」たる雑誌として『現代』の地位を確立することを目指したといえるだろう。また、おそらくは杜衡の編集への参加も「販売戦略」と関わっていると思われる。

(35) 胡秋原の談話によれば胡秋原と杜衡が知り合ったのは1933年の1月1日のことであったとされている（一林「与作家談話記——胡秋原」『読書与出版』第2・3期合併号、1933年5月）。楊邨人と韓侍桁も『読書雑誌』に早くから寄稿しており、おそらくは1933年前半には胡秋原とも面識があったことだろう。韓侍桁の回想によれば楊邨人とは1933年末から1934年はじめにかけて胡秋原を通じて知り合ったとされており（韓侍桁「我的文学経歴与交往」『新文学史料』1987年第3期、78頁）、このように『読書雑誌』・胡秋原を通じて杜衡・楊邨人・韓侍桁グループが形勢されたことは興味深い。これは『読書雑誌』側の左連に対する「意趣返し」ともいえるようである。

(36) さらに前述したように傅東華と杜衡の「個人的」な「確執」や「休士在中国」事件も存在していたため事態は相当に複雑化していったのであった。

(37) この時期の魯迅と施蛰存の論争に関しては丸山昇、前掲「施蛰存と魯迅の「論争」について」を参考としている。

(38) このような1933年後半以降の魯迅の論理はあくまで「魯迅の論理」であって杜衡・楊邨人・

韓侍桁だけでなく施蛰存やさらには穆時英まで「第三種人」に加える考え方は、当事者の人脈から考えればやはり「拡大解釈」であるといえるであろう。この問題に関しては穆時英を「第三種人」とする谷行博「第三種人」論争の問題点（『野草』29、1982年）に対して発表された前田利昭「第三種人」論争に関する谷氏の論述に触発されて」（『野草』32、1983年）も参考となる。

(39) 魯迅のこのような考え方は、1933年11月5日付姚克宛の書簡（『魯迅全集第12巻』人民文学出版社、1981年所収）をはじめさまざまなところで見られる。この問題に関しては丸山昇「魯迅書簡」に見る1930年代上海の一面（『朱夏』7、1994年）、同、前掲「施蛰存と魯迅の「論争」について」を参考としている。

(40) 杜衡は生活は苦しかったようであるがこの時期は国民党側と妥協することはなかった。杜衡1934年12月7日『大晩報』掲載の「公開書簡」（魯迅「後記」『且介亭雜文二集』三閑書屋、1937年にも所収）、杜衡「一分被迫害的記録」（初出は『今日中国』であるが掲載号数は不明、陳漱渝「關於杜衡先生的一篇回憶」、『魯迅研究動態』1989年第2期に付載、『五四文壇鱗爪』中国文史出版社、1998年にも所収）参照。

(41) 韓侍桁「我的文学経歴与交往」『新文学史料』1987年第3期。千野拓政「胡風と『時事類編』」（『中国文学研究』14、1988年）によれば左恭が地下黨員であったというのは事実のようである。

(42) 『文壇史料』大連書店、1944年、219頁。韓侍桁の伝記に関しては子安加余子「『語絲』と韓侍桁」（『お茶の水女子大学人間文化論叢』3、2001年）に詳しい。また、杜衡・楊邨人・韓侍桁グループを左連から分化するものとする見解は、丸山昇「問題としての1930年代——左連研究・魯迅研究の角度から」『1930年代中国の研究』（アジア経済研究所、1975年）においてす

で示されている。この問題は「歌徳論文」の問題を含めより詳細な検討が必要であるが、本稿では焦点を「文壇史」的側面に絞り内容に関しては深入りしない。

- (43) 韓侍桁「“掲起小資産階級革命文学之旗”」『読書雑誌』第3巻6期, 1933年6月, 後に『文学評論集』現代書局, 1934年所収, 同書218頁参照。杜衡「一分被迫害的記録」でもそのようなことが暗示されている。この問題は前田利昭, 前掲「第三種人」論争における馮雪峰」35頁でも触れられている。
- (44) 楊邨人「離開党政党生活的戰壕」(『読書雑誌』第3巻1期, 1933年1月), 同「掲起小資産階級革命文学之旗」(『現代』第2巻4期, 1933年2月)で「離脱」の理由が詳述されている。
- (45) 例えば, 魯迅グループが地下で刊行した『文学新地』創刊号(1934年9月)では, 楊邨人から内山書店にあった魯迅『南腔北調集』のうち自分の記事が掲載されている部分だけを破って持っていったという主旨の手紙を受け取ったとしてその内容を掲載している。その事実とはともかくとしてすでに「論争」の域を越えたところまで事態はたどり着いていたのである。
- (46) 何家槐盗作事件に関しては潘頌徳「何家槐」(『三十年代在上海的“左連”作家』上海社会科学院出版社, 1988年)を参考としている。何家槐は1911年生まれ, 金華七中時代同学の徐軫蓬・王一心らと文学活動を開始し, 1930年に上海中国公学大学部に入学後も彼らと活動, 1932年暨南大学在学中に良友図書印刷公司から単行本も刊行している。同時に左翼思想にも早期から関心を抱き, 1933年には左連への加入も果たしていた。一方の徐軫蓬は何家槐とともに金華七中時代に創作を開始し, 1930年には王家楫・艾蕪とともに『現代文学評論』の文章公募に当選, 『新月』などに作品を発表するなどこの時期までに文壇と若干ではあるが接点を持ってい

た。しかし, 発表機会に恵まれなかったようで, 文壇でより知名度のあった何家槐の名義で自らの作品を発表することを容認していたようである(何家槐によって字句の改変はいくらかあったようではあるが)。その後も韓侍桁から高く評価されるなど一定の評価と知名度を獲得したが, 一貫して作家としては不遇であった。

- (47) 小谷一郎「三〇年代後期の田漢と魯迅」(『転形期における中国知識人』汲古書院, 1999年)に詳しい。
- (48) 小谷一郎「三〇年代後期の田漢と魯迅」同上書, 192頁。
- (49) この「胡風転向疑惑」に関しては千野拓政「2つの資料——胡風帰国の日時および穆木天の転向について」(『法政大学教養部紀要』70, 1989年)などを主に参考としている。
- (50) さらに茅盾も胡風に対して嫌疑を抱くようになったとされるが, この「真偽」に関しては白水紀子「茅盾と胡風(一)」(『茅盾研究会会報』3, 1985年), 同「茅盾と胡風(二)」(『茅盾研究会会報』4, 1985年)にあるように慎重な考察を要するようである。
- (51) 1934年7月には廖沫沙(林默)が「論《花边文学》」(『大晚报・火炬』1934年7月3日)で魯迅を批判, 論争に発展するできごともあった。
- (52) 周立波は1934年周揚の紹介で左連及び共産党に加盟したため周揚に近い左連の「文委」グループに位置していた。この間の事情に関しては前掲『周立波研究資料』特に周揚「關於周立波同志的一些情况」に詳しい。
- (53) 韓侍桁の回想によれば『星火』は杜衡・韓侍桁が20元そのほかの同人が4~5元ずつ出して創刊にいたったとされる。発行部数は2000部(前掲「我的文学経歴与交往」, 78頁)。発行元が上海雑誌公司であり張静廬と杜衡の関係からある程度の借金はきいたようだが, 最終的に印刷費が200元不足して停刊になった。『星火』は新人

の発掘を重視、英子も杜衡に5元支払ったと回想しているように（「我所認識的王瑩」『新文学史料』1986年第1期）、若手作家との結びつきを強めていく方向で支持の拡大を図っていった。1935年8月の『文学』第5巻2期に発表された徐懋庸「文芸自由的代価」ではこのような『星火』の活動が批判的に取り上げられているが、それは『星火』の活動が注目を受けていたことを示すものであるともいえるであろう。

- (54) 『訳文』の一時停刊の事情は、黄源『魯迅書簡追憶』（浙江人民出版社、1980年）、同「紀念夏師巧尊」（『出版史料』第7期、1987年）、陳思和・李輝「記文化生活出版社」（『新文学史料』1982年第3期）に詳しい。また、同時期『文学』主編の傅東華が周文の短編を無断で改作しそれに周文が抗議する事件もあった。周文を魯迅がたしなめたため、逆に魯迅が周文のバックにい

るという「噂」が拡大したことも生活書店と魯迅の関係の悪化を促した一因であるようだ。ちなみに、黄源は伍蠡甫と親しく、『世界文学』の停刊によってちょうど新雑誌の創刊を期していた黎明書局から『訳文』の続刊を図ろうとしたが、魯迅の拒絶にあい頓挫したともされる。

- (55) 魯迅と文化生活出版社との関係は、1934年7月に創刊され吳朗西らが編集にあたっていた『漫画生活』に黄源を通じて魯迅が寄稿していくあたりから深まっているようである。「訳文叢書」は1935年11月より文化生活出版社から刊行され、『訳文』も文化生活出版社から続刊された。
- (56) 『新小説』に関しては趙家璧「回憶鄭伯奇同志在“良友”」（『新文学史料』1979年第4期）に詳しい。『新小説』などをめぐる魯迅と孟十還との関係は欽鴻「孟十還軼事」（『新文学史料』1993年第4期）に詳しい。

● 会員動静 ●

古島琴子所員 『攀枝花の咲くところ——雲南タイ族の世界』創土社
丸山 昇所員 『文化大革命に到る道』岩波書店
朱 建榮所員 『毛沢東のベトナム戦争 中国外交の大転換と文化大革命の起源』東京大学出版会
沼尻 勉所員 『上海・浦東 IT世界戦略基地の実像』講談社
小島晋治評議員・大沼正博所員 『わかりやすい中国の歴史』明石書店
阿部雅志所員ほか 日中貿易逸史研究会編著 『ドキュメント黎明期の日中貿易1946年—1979年』東方書店
小島晋治評議員・大里浩秋所員・並木頼寿所員編 『20世紀の中国研究 その遺産をどう生かすか』研文出版

2001年度編集委員会が今月より以下になりました。今後ともよろしくお願い申し上げます。
委員長 大里浩秋／常務委員：天兒慧，宇野和夫，加々美光行，菊池道樹，國谷知史，栗原純，代田智明，園田茂人，田島俊雄，田畑佐和子，並木頼寿，丸山松幸，三好章，村田雄二郎